

『就実論叢』第47号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2018年2月28日 発行

グローバル社会における絵本翻訳の役割と使命

The Role and Mission for Translation of Picture Books in Global Society

武 部 好 子

グローバル社会における絵本翻訳の役割と使命

The Role and Mission for Translation of Picture Books in Global Society

武 部 好 子 (実践英語学科)

TAKEBE Yoshiko

キーワード

・ 絵本翻訳 ・ グローバル社会 ・ 多言語

目次

- ・ はじめに
- ・ 1. 日本語絵本における擬音語・擬態語の効果
- ・ 2. 英語絵本における韻の魅力
- ・ 3. 多言語による絵本の読み聞かせ
- ・ 4. 多言語電子絵本の意義
- ・ 5. グローバル社会における絵本翻訳の役割と使命
- ・ 5-1. グローバリゼーションとローカリゼーション
- ・ 5-2. 電子媒体絵本翻訳の役割
- ・ 5-3. 紙媒体絵本翻訳の使命
- ・ おわりに

はじめに

擬音語や擬態語は文字で読むよりも発声して初めてその役割が活きてくる。特に文字が読めない子供にとって、絵と合わせて繰り返しの言葉が奏でるリズムカルな音調を耳にすることで、より絵本のストーリーの世界に自然と誘われる。

本稿は拙論「絵本の読み聞かせにおける演劇的翻訳」(『就実論叢』第43号)も踏まえて、日本語絵本の擬音語や英語絵本の韻の効果を考察する。また英語と日本語以外の多言語による絵本の読み聞かせや、電子絵本の意義についても言及する。最終的にはグローバル社会における絵本翻訳の役割と使命について見解を示す。

1. 日本語絵本における擬音語・擬態語の効果

実際の音を真似た「擬音語」や、聴覚以外の視覚や触覚などの感覚のイメージを表現する

「擬態語」は、ストーリーの絵を見せながら声を通して読み聞かせる際に、その役割を最大限に発揮するといつてよい。*Routledge Encyclopedia of Translation Studies*によると、児童文学の翻訳にとって大切なことは以下の点である。

音もまた子ども向けの翻訳にはきわめて重要である。子どもには物語を読み聞かせることが多く、音読用に翻訳しようとするとかかなりの力量が要求されるからである。子ども向けの物語は音読でも黙読でも明確な物語の流れとリズムへの細心の注意が必要である。子ども向けテキストには、繰り返しや韻、オノマトペ、言葉遊び、ナンセンス、新語、動物の鳴き声等がよく見られ、翻訳者の側にもかなりのレベルの言語的創造性が要求される（ペーカー 33-34）。

各言語が持つリズム感を大事にしながら起点言語を目標言語に翻訳することは、特に翻訳された後に声に出して読まれる絵本翻訳の分野ではとりわけ重要なポイントとなることを改めて押さえておく。

絵本翻訳では特に飲食の場面において日本語の擬音語・擬態語が効果的な役割を果たす点について、拙論「絵本の読み聞かせにおける演劇的翻訳」（『就実論叢』第43号）の中でマックス・ベルジュイス（Max Velthuis, 1923-2005）作 *The Little Boy and the Big Fish*（1987）を例に述べた。少年はなかなか魚を釣ることができないが、まったく焦ることはせずに、ゆっくりのんびりと待ちながら、おやつを食べるシーンがある。

“He ate bread and butter and an apple, and had a big drink of milk. Then he felt sleepy,” は「バターつきのパン、そしてリンゴを食べ、ミルクを沢山飲んだ。すると、彼は眠たくなった」という直訳にメリハリをつけたい。「バターつきのパン」は「バターパン」とし、声のリズム感を意識して「沢山」は「いっぱい」に変える。また、少年の空腹感を更に強調するために、ただ食べるのではなく「ぱくりと」食べ、ただ飲むのではなく「ごくごく」と飲むと訳す。眠たい状態は、擬態語「うとうと」を用いたい。したがって「男の子は、バターパンとリンゴをぱくりと食べ、いっぱいのミルクをごくごく飲むと、うとうとしてきた」と訳すことで、前の文から醸し出されているイメージをスムーズに受け継ぐことができる（武部 41）。

飲食は子どもが成長する過程で身体的・精神的に必要な不可欠な日常の行動であり、そこに臨場感をもたせることは大切なポイントとなる。英語では一単語の動詞が、日本語になると繰り返しの擬音語・擬態語を追加して翻訳する。

日本語の擬音語・擬態語を生かして童話の世界を表現した作家として宮沢賢治(1896-1933)

が挙げられる。以下は宮沢賢治のデビュー作『雪渡り』において、かん子と兄の四郎が子狐たちに出会い、音を鳴らしながら雪を踏みしめる場面だ。

みんなは足ぶみをして歌ひました。
キックキックトントンキックキックトントン
凍み雪しんこ、堅雪かんこ、
野原のまんじゅうはぼっぼっぼ
酔ってひょろひょろ太右衛門が
去年、三十八たべた。
キックキックキックキックトントン (宮沢 26)。

齋藤孝も指摘するように「擬音語や擬態語がうまいのも、賢治の特徴だ。『雪渡り』の「キックキックトントン」などは、雪を踏みならす音が楽しく表現されている。言葉のテンポやリズムも最高だ。だから賢治の文章は声に出して読むと、いっそう味わい深くなる。読んでいて、こちらのからだに賢治のからだがり乗り移ってくるようだ」(齋藤 2004)。読書離れを食い止め、日本人が幼いころから母語を大切に育むためには、擬音語や擬態語を意識しながら、大人が子供に絵本を声に出して読み聞かせたり、子供が絵本を通して発話しやすいような環境を提供したりすることが有効となる。

また東北出身の宮沢賢治による『雨ニモマケズ』は、東日本大震災直後の2011年4月11日に米国ワシントン国立大聖堂 (Washington National Cathedral) で行われた宗派を超えた追悼式において英語で朗読され、その模様は世界中でテレビ放映された。宮沢賢治作品の英語翻訳(追悼式で読まれたのは別の翻訳者による)を手掛けるロジャー・パルバース (Roger Pulvers, 1944-) は「賢治が残した詩や物語は、日本人に対してだけではなく、世界の人々にも強く訴えるものを持っています。賢治の文学は、もはや日本人だけのものではありません」(パルバース iii - iv) と強調している。また『雨ニモマケズ』を *Strong in the Rain* と翻訳したパルバースは、リズムについて以下のように説明している。

「雨ニモマケズ」の詩は、最初の1語が重要です。この詩は「雨」という語から始まります。したがって、英語にするにあたっては、原文と同じように、最初の1語を強烈な印象を与えるものにしたいと思いました。そこで僕は strong という単語でこの詩を始めることにしました。この strong という英語は詩的な響きも備えています。これを冒頭に出すことで、日本語の原文と同じようなリズムを英語で奏でられる、と考えたのです (パルバース 8)。

更に宮沢賢治が瀕死の妹から雪をとってきてほしいと頼まれる様子を描いた『永訣の朝』

において、「みぞれはびちょびちょふってくる」を「The sleet sloshing down」と翻訳した
パルパースは擬音語について以下の通り分析している。

この「みぞれはびちょびちょふってくる」という一節を翻訳するにあたって花
巻のような寒い地方ではどんなみぞれが降るのか、まず想像してみなければな
りません。その上で、「びちょびちょ」という原文の「音」に近い響きや印象
をもつ英語表現を考えてみる必要があります。日本語では、「びしゃ」とか「び
ちゃ」とか「びしょ」という音によって、「水」や「水分」の感じを表現する
ことが多いように思います。それに対して英語は、これはおそらくゲルマン語
源から来ていると思われますが、sl や sh や dge などによって、よく水の動き
を表現します（dge は土や泥のイメージも強く連想させます）。ここで使った
slosh（「水が」パチャパチャととび散る）という動詞は、slush（「半解けの雪、
湿った雪」「ぬかるみ、どろどろのもの」）や、sludge（「[ぬるぬるの] 泥」「ぬ
かるみ、雪解けのぬかるみ」）などの擬音語・擬態語と、語源は同じです。同
じように、sleet（みぞれ）も、slippery（「道など」つるつるした、よく滑る）
も、slide（滑る、滑走する、滑るように動く）も、すべて擬音語・擬態語で
す（パルパース 69）。

英語の擬音語にはゲルマン語源の規則が見られ、英語の単語にも動作を表す音が含まれてい
る点に留意して、起点言語の擬音語のイメージを壊さないように目標言語に翻訳した。

2. 英語絵本における韻の魅力

日本語の絵本では実際の音を真似た「擬音語」や、聴覚以外の視覚や触覚などの感覚のイ
メージを表現する「擬態語」が、作品のストーリーを効果的に伝える役割を果たす。一方、
英語の絵本では動物の鳴き声以外に繰り返しの擬音語を用いる場面は少ない。日本語の擬音
語・擬態語に匹敵する特徴として、英語の絵本では韻（rhyme）がある。絵本を通して韻、
類音、頭韻などの現象を再現することは、子供たちのコミュニケーション力を自然に促進す
ることにもつながる。

音声にはおおまかにいって2種類の要素、すなわち音韻と韻律が含まれており、
人はその両方を巧みに用いてコミュニケーションを交わしていると考えられ
る。音韻は音声を文字化したとき、どのように表記されるかということに密接
に関係している。つまり、音韻には発話文の言語的な内容に関する情報が多く
含まれている（広瀬 139）。

拙論「絵本の読み聞かせにおける演劇的翻訳」（『就実論叢』第43号）でも述べたように、例えば、クエンティン・ブレイク（Quentin Blake, 1932-）作・絵、谷川俊太郎訳の『マグノリアおじさん』（*Mister Magnolia*, 1980）という絵本作品においても、英語絵本を翻訳する際に、起点言語の韻（rhyme）を目標言語でも生かされることが求められる。

“And two lovely sisters who play on the flute — But Mr Magnolia has only one boot.” の下線部は韻が踏まれているが、日本語訳でも「ふたりの いもうと の フルート は ぴぷっぽ ぴぷっぽ — でも マグノリアおじさんの くつ は かたっぽ」というように、起点言語である英語のリズムが生き生きと目標言語である日本語の響きに見事に表現されていた（武部 43）。

英語絵本における韻の魅力を伝える意味でも、*The Jester Has Lost His Jingle* (1995/2012) は考察に値する作品である。この絵本は当時イエール大学に通うアメリカ人大学生で1990年に22歳の若さで亡くなったデイヴィッド・ザルツマン（David Saltzman, 1967-1990）が文と絵を手掛けた。

But today when the Jester broke out in his song,
How could he have known that something was wrong?
When he started his routine, and strutted on the stage,
How could he have known that the King was in a rage? (Saltzman 2012,
下線は筆者)

主人公 Jester は宮廷に仕える道化師であるが、ある日、王から追放され、城外の世界をさまよい笑いを探す旅に出る。

“The Jester has lost his jingle!” the King yelled in dismay.
“His bells no longer tingle! That’s all I have to say!”
Then without a thought and on a whim,
the King decided to banish him (ibid.).

街の喧騒を行き交う人々は皆忙しく、他人に構っている暇などなく、しかめ面ばかりである。そこで病院を訪れた Jester は、入院中の意気消沈した女の子に出逢った。

The little girl looked up and her eyes were opened wide.
She turned slowly to the Jester, and she quietly replied.

“Here I lie, I have a tumor...

And you ask me where’s my sense of humor?” (ibid.)

Jester は女の子を励ますためにお得意の歌や踊りやお話を滑稽に披露して彼女を楽しませた。すると女の子は笑いだし、その笑い声が病院の外に伝染し、街中の人々も徐々に笑い始めた。そして虹色の旗を翻しながら城に戻った Jester は王に再会し、街中が笑顔を取り戻し「笑いとは自分自身の中に隠れている」と報告すると、王たちも笑いの渦に包まれた。

Laughter’s like a seedling, waiting patiently to sprout.

All it takes is just a push to make it pop right out.

Don’t keep it imprisoned or locked out of sight!

Quickly release it! It won’t hurt or bite! (ibid.)

英語の韻を踏むことによって、作品の現在性やライブ感覚が助長され、紙面に書かれた文字は生きた言葉として再現可能となる。このリズム感溢れる絵本作品は、以下の作者によるメッセージを包括している。

The best we can do is live life, enjoy it and know it is meant to be enjoyed
– know how important and special every time...moment...person is. And at
the end of the day say, ‘I have enjoyed it, I have really lived the moment.’
That is all. All is that. Is. Is is such a powerful word. It’s not was or will be.
It is IS: Is is alive (ibid.).

「今を笑って楽しむことの大切さ」「答えは自分自身の中にある」というメッセージは、英語絵本における韻の魅力を通して生き生きと表現されている。作者はイエール大学4年生在学中に不治の病に侵され、治療の傍らこの絵本を完成し、大学卒業後1990年3月に逝去したが、自分の絵本を難病で苦しむ子供たちに配布してほしいとの遺言を残していた。

3. 多言語による絵本の読み聞かせ

英語が世界共通語であるグローバル社会において英語による絵本の読み聞かせは珍しいことではない。一方、英語以外の外国語による絵本の読み聞かせは行われているだろうか。2000年4月、東京都目黒区に子供連れで参加できる日本語教室「にほんごの会くれよん」を開設した石原弘子氏は、英語以外の外国語が軽視されていることを懸念し、社会が外国語を応援する場を提供すべきだと考えた。2005年12月、石原氏は目黒区八雲中央図書館に多言語での読み聞かせを提案し、多言語絵本の会 RAINBOW を設立した。この活動は、日本の子

供たちに向けて英語以外の多文化・多言語に触れる機会を設けるだけでなく、日本に住む外国人親子に自国語を使用できる場を与え母語を育成・継承していくことを可能にした。

2017年7月、石原氏が講師を務めた「英語による絵本の読み聞かせ研修会」（一般財団法人岡山県国際交流協会主催）に参加した。この研修会で最も強調されていたことは「日本語と英語以外の言葉にも、多くの人の関心が集まるのが、私の願いです」（石原 2017）という点であった。英語以外の言語や文化に触れることは、英語・欧米至上主義を払拭し、多文化・多言語が共生できる社会づくりの基本となる。外国人が求めているのは日本語と自国語のバイリンガル絵本であるという。例えば「全国の自治体の3分の1が参加しているブックスタート事業を通して、保健所の乳幼児検診時などに、日本語と自国語のバイリンガル絵本をプレゼントして、日本に住む外国人親子に母語の大切さを伝えてほしい」（石原 2017）と石原氏は提案している。

研修会では、トルストイのロシア民謡を基礎とした絵本『おおきなかぶ』（絵：佐藤忠良 訳：内田莉莎子）の日本語と中国語、アメリカの絵本『From Head to Toe』（Eric Carle 著）の英語と日本語、タイの絵本『グラドゥク グラディク グラドゥク グラディク』のタイ語と日本語による実演が行われた。原作言語が先に読まれ、翻訳言語を後に読むことで、各言語が持つ擬音語・擬態語のリズム感が浮き彫りになった。日本語による「うんとこしょ どっこいしょ」という重みのある繰り返しの擬態語は、中国語では「Hey yo hey yo」と軽快な音調であった。タイ語の絵本ではバツが跳ねる様子を「カルカレ カラカレ」と独特のタイ語の擬音語が繊細に響いた。英語の「clap」「swing」「kick」「wiggle」などの動詞の一単語が、日本語の翻訳ではそれぞれ「パンパンパン」「ゆらゆら」「ぽーんと けつとばす」「もじょもじょ」と擬音語・擬態語を追加することで効果的に表現されていた。

各実演では、絵本のストーリーを伝える演者の「声」と、同一演者による顔の表情やジェスチャーを交えた身体的な「非言語的表現」とが合致して聴衆を楽しませた。絵本の文字を「声」に置き換え、絵本の静止した絵を立体的な動く「情景」として具現化した。多言語による絵本の読み聞かせの実演は、三次元的な空間芸術として、後に述べる多言語電子絵本の「声」と「絵」の両方を兼ね備えていた。

音声には音韻と韻律があり、我々は両者を駆使してコミュニケーションを交わしていると前述したが「韻律は、文字言語にはない音声言語に特有の特徴であり、言語情報はもちろん、意図、態度、感情といったパラ言語情報、非言語情報の伝達に主要な役割を果たしている。音声言語をより深い意味で理解しようとする場合、韻律情報の処理は不可欠なものである」（広瀬 65）。

4. 多言語電子絵本の意義

絵本の形態は従来の紙媒体から、電子媒体へと進化し徐々に普及し始めている。電子絵本の場合、画面に絵が映し出され、読み聞かせの音声絵の場面と共に流れる。文字を読むの

が困難な人々にとって、絵本の世界を円滑に楽しむ最適な環境を提供している。その一例として「にほんごの会くれよん 多言語絵本の会 RAINBOW」が手掛ける多言語電子絵本がある。2009年3月、東京都目黒区役所は目黒区子ども条例の啓発を目的として、区内在住の絵本作家きむらゆういち氏に依頼し「目黒区子ども条例のえほん すごいよ ねずみくん」を発行した。以来「にほんごの会くれよん 多言語絵本の会 RAINBOW」を主宰する石原弘子氏は一冊の絵本を多言語で視聴できる多言語電子絵本を制作している。

電子絵本とは、目で絵を見ながら耳で音を聴くことによって、絵本の作品を自然に鑑賞できる読書支援ツールである。このスタイルを確立するには、翻訳だけでなく、音訳も求められる。翻訳では絵と文字が合致することが必要だが、音訳の際には文字と声が完全に一致していなければならない。「絵」「文字」「声」の三要素が三位一体となって初めて絵本作品の意味がメッセージとして視聴者に伝わる。

ここで言語学者ライス (Katharina Reiss, 1923-) によるテキスト・タイプに沿った翻訳方法について言及する。

Specific translation methods according to text type:

- (1) Informative text should transmit the full referential or conceptual content of the source text. The translation should be in 'plain prose', without redundancy and with the use of explicitation when required.
- (2) Expressive text should transmit the aesthetic and artistic form of the source text. The translation should use 'identifying' method, with the translator adopting the standpoint of the source text author.
- (3) Operative text should produce the desired response in the target text receiver. The translation should employ the 'adaptive' method, creating an equivalent effect among target text readers.
- (4) Audio-medial texts require what Reiss calls the 'supplementary' method, supplementing written words with visual images and music (Reiss 1989:108-9, Munday 72-74).

テキストは4つに分類され、(1) 起点テキストの指示的ないしは概念的内容を完全に伝えなければならない「情報型」テキストの翻訳は「平明な散文」として明示化され、(2) 起点テキストの審美的かつ芸術的な形式を伝えなければならない「表現型」テキストの翻訳は原著者の視点を取り入れ「一体化」方法を用い、(3) 望まれる反応を目標テキストの受け手から引き出さなければならない「効力型」テキストの翻訳は「翻案」方法を用いて目標テキストの読者に等価効果を生み出し、(4) 「オーディオ媒体」テキストは、ライス氏が「補完」方法と名付けたものを必要とし、視覚映像や音楽で文字を補う。

絵本の翻訳では、まず上記（２）「表現型」テキストとして、起点テキストの芸術的・美的な形式を原著者の視点から原著者と「一体化」して「文字」に翻訳しなければならない。ロジャー・パルバースが宮沢賢治の世界に込められた擬音語・擬態語も含むメッセージを忠実に翻訳したことに通じる。更に電子絵本では、上記（４）「オーディオ媒体」テキストとして、絵本の「絵」と読み聞かせる「声」によって「文字」を補完していく。

またライスによると、以下の言語内基準と言語外基準がある。

- (1) Intralinguistic criteria: semantic, lexical, grammatical and stylistic features;
- (2) Extralinguistic criteria: situation, subject field, time, place, receiver, sender and 'affective implications' (humor, irony, emotion, etc.)
(Reiss 1971/2000: 54-88, Munday 74).

電子絵本の翻訳を効果的に行うためには、まず上記（１）言語内基準によって、起点テキストの意味的、語彙的、文法的、文体的特徴を「文字」に翻訳し、加えて上記（２）言語外基準の観点から、印刷物を読むのが困難な人たちに向けて、作品のテーマやユーモア、皮肉、感情などの「情動的含意」を「声」に「音訳」していくことが求められている。

５．グローバル社会における絵本翻訳の役割と使命

以上、日本語、英語、多言語による絵本について考察してきたが、最後にグローバル社会における絵本翻訳の役割と使命についてまとめる。

5-1. グローバリゼーションとローカリゼーション

グローバリゼーションとは *Routledge Encyclopedia of Translation Studies* によると、“the intensification of worldwide social relations which link distant localities in such a way that local happenings are shaped by events occurring many miles away and vice versa” (Giddens 64, Cronin 126) と定義されており、ある特定の地域で起きている事柄が、遠く離れた場所で起きている出来事によって形成され、あるいはその逆の形で、地域を結び付ける世界的な社会的関係の強化のことである。一方、社会がグローバル化するにつれて、国や地域に根差したローカリゼーションも重要となる。

Localization can be defined as the linguistic and cultural adaptation of digital content to the requirements and locale of a foreign market, and the provision of services and technologies for the management of multilingualism across the digital global information flow (Schaler 157).

ローカリゼーションとは、外国市場の要求や設定に応じてデジタルの内容を言語的・文化的に適応させ、グローバルなデジタル情報の流れにおいて、多言語主義を展開するために、サービスや技術を提供することである。

絵本翻訳の使命は、グローバリゼーションとローカリゼーションのいずれか一方に分裂・偏向することではない。両社の併存と並行的進行こそが、絵本文化の更なる高次元への進歩・発展に資するものである。

5-2. 電子媒体絵本翻訳の役割

本稿で挙げた多言語電子絵本の役割は以下の2点である：(1) グローバル社会において、英語以外の言語と文化を広く維持・育成・継承し、多言語・多文化の共生に寄与する。(2) 印刷物を読むのが困難な人たちに向けて、作品を視聴覚的に鑑賞できるように読書を支援する。

筆者は電子媒体絵本の翻訳を支援する。なぜなら、それは空間軸においては、絵本文化の世界を容易に享受し得る最適環境を地球規模で実現するからである。また時間軸の面では、昼夜を問わず、読み聞かせを行う大人が不在の場合も、電子絵本の「絵」「文字」「音声」を通して幼児の成長過程に必要な母語力や情緒を育み、更に将来、大人の現実世界に入った後も、豊かに生きる大きな一助になる。その点で、電子媒体絵本は近未来の一つの理想像となる。

5-3. 紙媒体絵本翻訳の使命

グローバリゼーションとローカリゼーションを併存させるためにも、IT化時代に対応した電子媒体絵本だけでなく、従来どおり紙媒体絵本の特徴も残していく必要がある。実際に一冊の絵本を手にとって、読み聞かせを行う大人と、それを聴く子どもとの間で交わされるコミュニケーションは、電子絵本の音声からは得られない、より自然な人間的感性を育む。固有の自国文化への誇りや、母国語の堅持・育成・継承への一種のナショナリズム志向は各国において極めて根強い。この視点から判断しても、どんなに便利な電子媒体絵本の翻訳が発展しても、紙媒体絵本の翻訳は維持していくべきだ。

本稿で挙げた英語絵本 *The Jester Has Lost His Jingle* は、家族が作者の遺志を継ぎ1995年に初出版され、出版初年度はホワイトハウス（当時はビル・クリントン大統領）のイースター行事の読み聞かせ本として使用された。2000年に作者の母バーバラ・ザルツマン（Barbara Saltzman）が非営利団体 The Jester and Pharley Phund を設立し活動を拡大し、難病や貧困家庭の子供たちの自己啓発プロジェクトを実施している。米国の新聞ニューヨーク・タイムズがベストセラーとして取り上げたほか、2015年5月の母の日に米国テレビ局CBSが特集を放送している。また日本でも親しまれているスヌーピーが登場する『ピーナッ

ツ』(Peanuts)の作者チャールズ・シュルツ(Charles Monroe Schulz, 1922-2000)や『かいじゅうたちのいるところ』(Where the Wild Things Are)を書いたアメリカの絵本作家モリス・センダック(Maurice Sendak, 1928-2012)が推薦文を寄せている。

この絵本翻訳の使命は以下の2点である:(1) 海外プロジェクトは日本が初となり、今後、日本語の翻訳版を出版し、病院や小学校に紙媒体の絵本を配布する。作者は生前1980年13歳の時に家族で日本を訪問しており、北海道・東京・大阪・京都・広島など日本の主要都市を周った。(2) 2012年にはスペイン語・英語のバイリンガル絵本を米国国内で出版しており、今後、多言語に翻訳し、作者のメッセージを通してグローバル社会に生きる世界中の子供たち一人一人に気付きをもたらす。

おわりに

社会のグローバル化に伴い、英語を共通語とした世界の流れは加速化している。このようなグローバル社会において、英語以外の言語で書かれた絵本は、母語を育成し継承していくために重要な役割を果たす。欧米以外の文化に対して誇りを持ち、自国の文化を存続させていくためにも、絵本は有効な手段である。絵本は声に出して初めてその言語の持つ魅力が発揮され、その意味が読者に伝わる。日本語の擬音語・擬態語や英語の韻(rhyme)をはじめ、各言語には特有の音韻が存在する。絵本を翻訳することは、別の言語に文字として翻訳するだけでなく、声として音訳することである。様々な言語による多様な声について、絵本を通して世界で共有することは、英語第一主義・欧米至上主義から脱却し、多言語・多文化共生社会を構築することにつながる。良質な絵本における作者の真摯なメッセージが、多言語による絵本の読み聞かせや電子絵本を通して、国・地域・人種・立場を超えて多くの人々に届くことが期待される。

謝辞

「にほんごの会くれよん 多言語絵本の会 RAINBOW」主宰者 石原弘子氏、英語絵本 *The Jester Has Lost His Jingle* の日本への紹介者 樋口博子氏に感謝致します。

引証文献

- Cronin, Michael. 'Globalization'. Baker, Mona, and Gabriela Saldanha, eds. *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*. Second Edition (pp. 126-129). London: Routledge, 2011.
- Giddens, Anthony. *The Consequences of Modernity*. Stanford, CA: Stanford UP, 1990.
- Munday, Jeremy. *Introducing Translation Studies*. London: Routledge, 2001.
- Reiss, K. *Möglichkeiten und Grenzen der Übersetzungskritik*, Munich: M. Hueber, translated (2000) by E. F. Rhodes as *Translation Criticism: Potential and*

- Limitations*, Manchester: St Jerome and American Bible Society, 1971/2000.
- . 'Text Types, Translation Types and Translation Assessment'. (Translated by A. Chesterman) in Chesterman A. ed. *Reading in Translation Theory*, Oy Finn. Lectura Ab., Finland (pp. 105-115), 1989.
- Saltzman, David. *The Jester Has Lost His Jingle / El bufon ha perdido su gracia* Translated by Natalia Aurrecochea. California: The Jester Co., 2012.
- Schaler, Reinhard. 'Localization'. Baker, Mona, and Gabriela Saldanha, eds. *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*. Second Edition (pp. 157-161). London: Routledge, 2011.
- 石原弘子. 「一般財団法人岡山県国際交流協会主催 英語による絵本の読み聞かせ研修会：多言語読み聞かせと電子絵本」. (2017年7月23日, 岡山国際交流センター).
- 齋藤孝. 『子ども版 声に出して読みたい日本語 第1巻 「宮沢賢治」』(下田昌克・絵, 宮沢賢治・文). 東京: 草思社, 2004.
- 武部好子. 「絵本の読み聞かせにおける演劇的翻訳」. 『就実論叢』第43号. 就実大学, 2013.
- パルバース, ロジャー. 『英語で読み解く賢治の世界』(上杉隼人・訳). 東京: 岩波書店, 2008.
- 広瀬啓吉 編著. 『韻律と音声言語 情報処理—アクセント・イントネーション・リズムの科学』. 東京: 丸善, 2006.
- ベーカー, M.・サルダーニャ, G. 『翻訳研究のキーワード』(藤濤文子監修・編訳). 東京: 研究社, 2013.
- 宮沢賢治. 『雪わたり』(いもとようこ・絵). 東京: 金の星社, 2005.